東京都三多摩公立博物館協議会報

ミュージアム　多摩

No.4

発行：昭和58年２月25日

町立五日市町郷土館　三つの部門と一つのねらい

昭和57年11月で開館一周年目を迎えた五日市町郷土館は次の三つの部門をもちます。

（一）歴史部門

五日市は名前のなかに歴史の織りこまれた町で、秋川の渓口集落として栄えた市場町です。山方、里方の物産とくらしの中継地としての五日市の立場を商業民具や図によって解説しました。また二階の特別展示室は「目でみる五日市町史」の部屋として、考古資料、板碑、中近世文書、近代の五日市憲法資料などを展示してあります。

（二）民俗部門

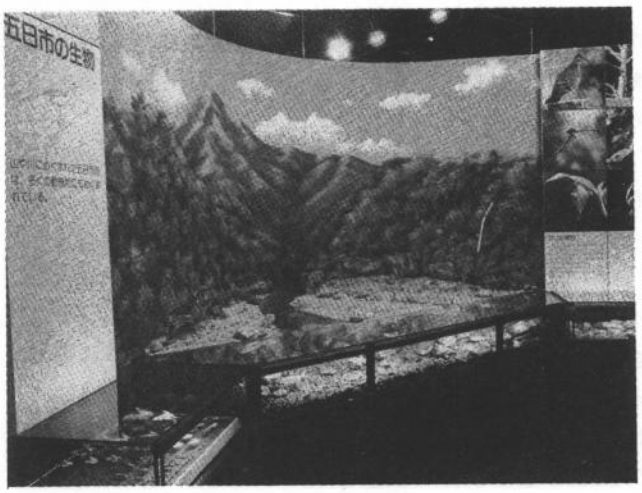
経済の高度成長以来、くらしぶりは激変しました。とくに五日市町では町の中央通り（都道）の拡幅工事も加わり、建物の建替え土蔵の取こわしなど相つぎました。不要なくらしの道具が処分されていきます。手作り時代の道具の中には昔のくらしの困難さや、それを克服してゆく人間の知恵と努力のあとをしのばせるものが多いのですが、それらを次代へ伝えたいと考えました。幸い五日市は養蚕、畑作地帯でしかも川の漁業、山の林業など多種多様の生業とくらしがありましたので、これにともなう民具の種類も豊富です。これを整理してわかりやすく展示しました。

（三）自然部門

五日市は奥多摩の山々に囲まれ、秋川の流れにそった町です。まだまだ破壊されることの少い環境のなかで動植物が自然の生態系を保っている珍らしい土地で、都民憩いの場でもあります。また化石の宝庫として注目され、専門家の間では地学学習の場として知られているところです。子供のよろこぶ秋川のジオラマと古代象をふくむ豊富な化石を展示してあります。

○当館のねらい

名のある文化財や高価な美術品はなくても、地域の実態を正しく反映し、小型ながらまとまりのある展示を心掛けました。とくに歴史民俗自然の三部門について、子供たちの学習の場となるよう、わかりやすい展示を目指したつもりです。「よい郷土の展示館はよい教育機関である。そして学習者に効果のあるものは、観光者にも魅力がある。」と考えております。



●場所　西多摩郡五日市町五日市920
●電話　0425―96―４０６９
●規模　敷地　1710㎡
建物　延 707㎡（地上２階地下１階）
展示室　延 260㎡（３室）

●休館日　毎週火曜午後・水曜、祝日
年末年始（12月27～１月４日）
●開館時間　午前 9：30～午後 4：30（5：00）
入場無料

開館から１年を経過して

武蔵村山市立歴史民俗資料館
乙　幡　正　義

武蔵村山市立歴史民俗資料館は、狭山丘陵の緑豊かな自然を背景に、１万数千年前に始まる武蔵村山市の歴史をはじめ、人びとの生活や自然環境の変遷等に関する資料を収集・保管するとともに、これらについての調査や研究活動を行い、その成果を広く一般市民に公開し、市民の教養、学術及び文化の発展に寄与することを目的として、昨年11月３日（文化の日）にオープンして以来満１年が経過いたしました。

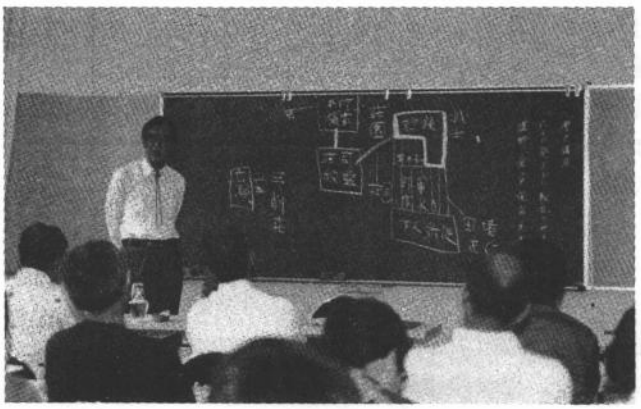
この間の入館者（または利用者）の状況をみると、個人入館者12.095人、団体入館者 2.626人（50団体）、講座等主催事業 379人、視察者等 149人（23件）の合計15.249人となり、１日平均54.9人（開館日数278日）でありました。

そのうち、個人入館者を地域別にみると、市内在住者が 7.173人で全体の59.3パーセントで入館者の約６割をしめております。一方、多摩地区在住者は2.173人で全体の18パーセント、他府県の方が 973人で全体の 5.9パーセント、(不明 1.079人）となっており、入館者の８割近くが市民または、多摩地域の方であります。年令別では、10才未満及び10才代が 7.279人で全体の60.2パーセントを占め、また月別では４．５．８月に集中して多くなっています。これは、資料館の西側の狭山丘陵に建設されている野山北公園（フィールドアスレチック、プール、キャンプ場等の施設がある。）の利用者の数と比例しており、このことは春休みや夏休みまた気候の良い５月に公園を利用する子供や家族連れが、資料館を見学していることを示しています。また、３．５．10月は個人入館者の他に団体入館者も多く、気候の良いこの頃に集中して団体の行事が行われていることがわかります。

このような状況にあって、初年度の入館者を対象とした事業としては、開館当初より行っている武蔵村山市の自然、歴史、民俗に関する常設展示の他、開館記念講座として、常設展示で御指導をいただいた先生方を講師にお願いして、　各々の展示コーナーに関する講座を３回、多摩地方の近世に関する歴史講座を５回開催しました。また本年度は、多摩地方の中世に関する歴史講座を５回と、新たな事業として、小学生（４．５．６年生）を対象に、狭山丘陵の植物を主に観察する子供自然教室を５回行いました。

老人会見学風景

一方、資料館として欠くことのできない、資料の収集及び調査、研究等の活動については、開館後間もないこともあってほとんど具体的な活動ができない状況でありましたが、資料の保存という観点から本年７月６日から10日までの間に、収蔵庫をはじめ全館を対象とした、エキボンによる燻蒸消毒を行いました。



歴史教室

以上、開館して以来約１年を経過した当館における入館者の実態や活動のあらましについて述べましたが、振り返ってみると、建設以前から予想されていた通り、入館者の大半が野山北公園の利用者であり、開館当初考えていた以上に入館者があったものの、資料館本来の目的である資料の収集や調査、研究活動をはじめ教育活動が充分に行えなかったこと等、反省する点も多くあります。

武蔵村山市立歴史民俗資料館が、〝資料館には珍しいものがあるから、公園に行った序に見学してみようか〟というような観光的な感覚で利用されるのではなく、〝資料館に行けば、地域の歴史や文化を正しく、より深く学習できるから行ってみよう〟というように、市民自らが積極的に利用する教育施設として、また、先人が伝えた貴重な郷土の文化遺産を後世に伝えるとともに、武蔵村山市の更には多摩地域における郷土史研究の拠点として、その役割を果たすためにはこの１年間の活動に対する反省点を充分踏まえ、今まで以上に三博協に加盟する先進博物館、資料館の運営に携わる方々の御指導と御協力をいただき、今後の活動計画を作成しなければならないと考えております。

民家の解体、移築について

羽村町教育委員会
島　田　秀　男

東京都西多摩郡羽村町羽西１丁目13番３号に建っていた旧下田家住宅にたずさわったのが、昭和53年12月頃からであった。当時下田季吉氏より新しい家を建てたいので、古い家は町へ譲ってもいいという申し入れがあった。この民家については、すでに町史編さん中から、また羽村郷土研究会々員の間ではこの家を保存し後世に残しておきたいという希望があった。そんな経緯もあって、町ではこころよく引受けた。

旧下田家住宅は、創建年代弘化４年（1847）で、国や都の文化財からするとそれほど古いものではなかった。しかし、家の保存状態がたいへん良く、民俗調査でも昔ながらの手法をよく伝えていることが判明している。それらはこの家に住んでいた下田さん一家が、この移り変わりの激しい時代の中で先祖の残していったものを大切に使っていたと言える。民家はその時代の生活様式の変化に敏感に反応する、この傾向はとくに高度経済成長後は顕著である。台所ひとつとってもステンレスの流し台の普及によって大きく変化した。そのような状況の中で、下田家ではカッテに水道も入れず水ガメを用い、ナガシはタチヒザナガシのままであったこと、煮炊きはユルリ（イロリ）でしていたことと考えあわせてみれば家の保存状態はわかっていただけるのではないかと思う。

町で復原事業を開始するにあたって、下田家を都指定にはならないだろうかということになり、早稲田大学教授渡辺保忠先生に調査をお願いした。その結果、保存すべきすばらしい民家だという言葉を頂戴したが、都指定にするには解体までの短い間では間に合わない、また解体後では指定できないということから、やむをえず町単独事業で実施することになった。地方財政窮迫の折、なかなかむずかしい状況にあったが、町当局の理解によって今日復原完了までたどりつけた。結果的には後世にまたひとつの文化財を残せたと思っている。

ここで、旧下田家住宅の復原にあたり、いくつかの問題点を整理したい。

その第一は、建築基準法では国指定文化財以外は通常茅（かや）で屋根を葺（ふ）くことができないことである。それゆえに銅板で葺いてしまうケースがあるわけだが、民家が銅板では、文化財としての価値は半減してしまう。旧下田家の場合、移築地が市街化調整区域であったこと、一般住宅より50m 以上離れていたこと等が幸いし、建築確認がとれた。もちろん国指定文化財の防災基準で設備を整え、万全を期した。建築基準法第三条には、国指定文化財は建築審査会の同意を得れば、同法から適用除外され茅葺きでも可能になることが明記されている。文化財として指定されているものの中には、国・都道府県・特別区・市町村の指定とさまざまであるが、その中で国指定が除外され他のものが適用されるのでは釈然としない。ただ何指定とランクづけをしただけで文化財のもつ価値にはかわりがないと考える。文化財に指定されるものは、一定基準の防災設備設置を義務づけたりすることで、建築基準法から適用除外にできないものだろうか。

第二は、民家の調査にあたり、大別すると建築学からとらえる場合と民俗学からとらえる場合の二通りの方法がある。『民家のみかた調べかた』（文化庁監修第一法規昭和57年発行）には、調査方法として①その民家の間取りがどうなっているか②造り方（構造）がどうなっているか③古い時代にはどういう形をしていたか④どういうふうに使われたか⑤いつごろ建てられたか⑥敷地との関係はどうなっているかとなっている。一方『民俗文化財の手びき』（文化庁内民俗文化財研究会第一法規昭和54年発行）では、①屋敷どり②間取りの使い方③家具・調度④建築工程と儀礼⑤防護を聞き取り調査すると書かれている。今回の旧下田家住宅復原にあたっては両方から調査を進めた。一方では片手おちであると考えたからである。建築学からのみかたでは、その建物の変遷、とくに民家の場合、間取りが重要視されているので、間取りの変遷はわかったにしても、そこに住んでいた人たちの生活状況はどのようであったかはっきりしない。民俗調査では逆にそこに住んでいた人たちがどのような生活をしていたのかを浮き彫りにできても、その人たちがどのような家に住み、その家はどのような変遷を経て今日に至ったかわからない。旧下田家の場合、人とすみかという視点から、建築調査も民俗調査も平行して実施してきたわけである。そのようにすることによってただ復原しただけでなく、生きてきたものとして後世に伝えていくことができるのではないか。旧下田家が 135年前に建てられた家であったこと、その家に96歳になるおばあさんが住んでいたことなどがあって、両面から調査が実施できたと思う。民家のおかれている状況が異なっていたにしても、復原するという行為の意味あいをそこにもってゆくことは重要なことであろう。

アメリカ東部の博物館を訪れて

調布市郷土博物館
学芸員　金　井　安　子

最近、アメリカ東部の博物館を見学する機会に恵まれたので、その見聞と感想を報告したいと思う。

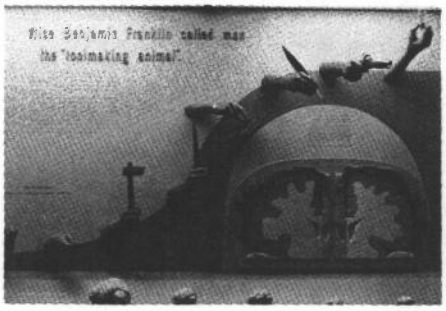
まず、スミソニアン・インスティテューションを中心にみていきたい。スミソニアンはワシントンのホワイトハウスや議事堂の程近くに位置し、13の博物館・美術館・動物園があり、この周辺地区はまさに政治と文化の中心の観がある。最初に日本との大きな違いとして目についたのは、クリスマス以外は年中無休で10時から17時半まで開館し、入館は無料、館内では三脚、ストロボ等を使用しなければ、自由に写真撮影をしてかまわないことなどである。この中で私は自然史博物館とアメリカ歴史博物館を見学した。自然史博物館は動植物や鳥類、海の生物、鉱物、化石、人類の進化、世界各地の民族と文化等がジオラマをふんだんに使って展示され、地球上のあらゆるものを対象とした博物館だった。動植物はその生育する自然環境がリアルに再現され、展示ケースの中が一つのまとまりをもった生態系として理解でき、文字パネルの説明も簡潔でわかりやすい英語で、その色も淡い青・緑・黄色などが使われ、見た目にもグラフィカルなものだった。また、資料の展示方法も壁面が有効に使われ、見やすいよう工夫されていた。

アメリカ歴史博物館の方はコロンブス以後の合衆国の歴史についての展示である。「昔のアメリカのくらし」というセクションでは植民地時代、開拓時代の住まい、学校、商店、郵便局等の室内が実物大で再現され、その中にはさまざまな生活用品が、あたかもつい先程までそこに人がいたかのように、生活のにおいを感じさせて配置されていた。日本で民家の中に民俗資料が単に置いてあるだけで、生気を失って見えるのとは大きな違いである。それはまるで湯気がたっているかのような状態でテーブルにお茶が用意してあったり、バスケットの中に編みかけのセーターがあったり、教室の黒板の板書や机の上に開かれた教科書など、細かいところまで手をぬかずに、生活の断面を鮮やかにきりとってみせているからであろう。また、「我ら人間」というセクションでは「人民の人民による……」というリンカーンの著名な言葉が展示の基調となっていて、ホワイトハウス前でのデモの様子が等身大の写真を使って展示されたり、大統領選挙のキャンペーンのチラシ・バッチ・ペナントなど細かいものも展示されていた。現代史関係は多くの写真によって構成され、その中では「白人専用」と書かれた門なども目についた。全体として歴史博物館の展示は解説の文字パネルがほとんどみられず、見て理解することが重視されているようだった。実際、私もこの展示を見て、多様な顔をもつアメリカの一端を確かにかいまみた気がした。

これらの展示スペースの他に、博物館の中にはキャフェテリアや本格的なレストランもあり、また、友の会々員のメンバーズルームやミュージアムショップ等がある。インフォメーションのカウンターには広い館内の地図や映画会・講演会・研究員による展示解説のツアー等の案内が用意されていた。ミュージアムショップではポスター・絵葉書・ペナント・バッチ・Tシャツや児童向けの絵本から専門書までさまざまなものが販売されていた。博物館の展示解説も無料のリーフレットから手ごろな価格のガイドブック、さらに詳細な書籍まで何種類か用意されている。またスミソニアンマガジンという雑誌が発行され、これはTVでCMも放映され、普及活動に対する積極的な姿勢がうかがわれた。

その他にボストン美術館では特別展「エジプトの黄金時代」が開催中で、この展示解説は無料のリーフレットが大人用、子ども用の2種類用意され、さらに有料の図録が販売されていた。ボストン美術館も含めて、スミソニアン以外の博物館では入館料が必要だったが、入館券の代わりに「寄付者」と書いたバッチを渡されたり、友の会々員や12歳以下は無料、また学割等もあった。開館時間も曜日によって延長するなど、利用者の便がはかられていた。

以上、見学したのはごく一部の博物館で、その上、英語も片言しかわからないため、見落とした点も多かったと思うが、アメリカの博物館のディスプレイや利用者に対するさまざまなサービスと積極的な普及活動等、私にとって学ぶべき点は多かったと思う。



人類の進化

先史時代の北アメリカ

ホワイトハウス前でのデモ

繊維博物館の会―その発足と運営の事例―

友　東京農工大学工学部附属繊維博物館　並木　覚

博物館に友の会なる組織が次々と生まれ、様々な活動が活発になされているようである。一般に友の会の基本的な考え方はユーザーを集め施設を有効利用し、その施設の発展を願うことと思う。

当館は明治期に創設され約 100年という歴史をもちながら、大学キャンパス内という特殊環境のため外来の見学者は少ないものであった。また国立大学の附属でありながら予算・館員が少ないこともあってＰＲも充分に行きとどかず、特別な人にしか知られない博物館だったようだ。

そして、この博物館の門戸を開放し、一般に広く見てもらうための方策のひとつとして「繊維博物館友の会」が55年１月にスタートしたのである。会則には、「会員は繊維に関心をもつ人々の集り」とうたい、活動として集会活動・サークル活動・ボランティア活動を設け、「会員の学習や研究の便宜をはかりかつ当館の発展を願う」ことを目的として誕生したものである。

昭和57年末現在で会員約 400名、当館の性格から主婦層が多く90％以上女性である。

集会活動としては展示会・講演会・講習会・見学会などを開催し、本年度は22回の行事を持ち、少なくとも２回は会員の出席があったようである。集会活動の立案、遂行までは館員が主体的に行動しているが、中でも展示会「友の会作品展」はサークル活動のしめくくりとしての行事であるが、会員が自主的に設営、展示作業まで行っている。

サークル活動は会員の中でもより熱心な会員の学習研究活動である。本年は７つのサークルが組織されて

57年サークル活動（３～12月まで）

サークル名	定員	活動日数	出席率	その他
①織物研究会	12名	48日	51％	枠織・手織
②ひも結び研究会	19	20	49	壁掛結びなど
③組ひも研究会	7	16	68	４ツ組から
④手つむぎ教室	15	27	53	植物染など
⑤レース研究会	13	23	74	ボビンレース
⑥刺しゅう研究会	9	21	76	パッチワーク
⑦和紙の花教室	11	18	61	季節の花
計	86名	173日	(61.3%)	

毎週何らかの形で活発に活動された。各サークルはそれぞれ目的をもち、代表者(講師)を置いて1年というサイクルで終るように計画されている。57年活動実績は別表に示す。サークル会員86名で出発し、この10ケ月間で 173日間の活動があった。毎週２～３のサークルが進められ、館員との交流も多く、いつも館内がにぎわい出した。出席の方は一年間の長期に渡るため平均で61.3％、社会教育では止むを得ない数字だと思う。

筆者は「織物研究会」の代表者(講師)となっているので、このサークルについて少々具体的に述べておこう。織物研究会は昨年スタートし、現在会員は１年生４名、２年生８名で全て主婦。20代から60代までおり経験、未経験は種々雑多である。初年度の56年は基礎づくりに専念。初期には人数も多かったため、カード織や原始機・高機・むしろ機など種々な方法により「織る」ことを体験した。本年は２年生を中心に定例、自主の研究日を設け、毎週一回のペースで活動を進めている。定例は全員顔を合わせることを目的とし、ミーティング、勉強会、発表会など行い会員の和をもつよう努めた。自主研は各自テーマをもち、それに向って堀下げ研究する姿勢を望んだ。初心者は上級生の手ほどきにより織技術を体得したのち、現在は共同研究という形で進めている。

問題もあるが、サークル運営は家族的な人間関係が必要であり、それがあって共同目的を達成するものと思う。毎週といっても年間多い人で50回、熱心な人は自宅でも作業を続け、基本的な織見本から着尺・つづれ織・タペストリーなど立派な作品ができている。

当館のサークル活動は全て公開である。事情があって見学できないときもあるが、技術展示というか生きている展示という意味で一般見学者に見てもらうことを原則としている。これは当館独自のアイデアだと思っている。もうひとつサークルとは自発的なものであり、会員が自主運営されるのが望ましい。各自が講師となりまた生徒となり、自主的活動こそ真のサークルだと思う。だから講師もいらないし、月謝も不要である。だが現実は講師たる核が必要であり、よい講師がないとより高いレベルに到達できない面がある。講師は学習意欲を続行させるパイロットでよいと思う。

もうひとつのボランティア活動。今のところ当館の特別展や催し物に対する〝補助〟としての活動が多い。例えば特別展における看視や受付、また繭玉祭でのだんご作りなど館員の職務の代行が多いが、展示解説や催し案内など高度な知的レベルを要するコンパニオンの方が将来のボランティア活動の中心になるであろう。その一例として本年８～10月に３つのサークル企画の講習会を催し、会員がボランティアとして受講生の手助けを勤めた。このような活動こそ博物館ボランティアのよい例だと考えている。

以上のように当館では３年目にして友の会活動が活発に動き始めたが、それには館活動と友の会活動が分離せず一体となっていることもみのがせない点である。次第に組織が大きくなり友の会が独立できれば、それなりにニュース発刊や独自活動が進められる時も来るであろう。現在では初期目的である施設の有効利用の面では十分はたしていると評価している。

〔展示活動のお知らせ〕

館　名	展示会名	期　間	内　容
青梅市郷土博物館	桶と樽展	57. 2～57. 12	伝統技能としての、桶職人の技術と同職集団として太子講の紹介。
	ツクエ（机）展	58. 2～58. 12	市内に残る座机を中心に、伝統的な家具のうち、学習用、事務用の机を展示し、合わせて市内小学校初歩時の様子を紹介する予定。
	杣保の中世展	常設	市内今井城跡出土の板碑をはじめ、杣保と呼ばれた中世の当地に関する展示。
奥多摩郷土資料館	小河内の郷土芸能	53. 4～	小河内の郷土芸能ー(都指定文化財)獅子舞、鹿島おどり、車人形ーを展示。
	山村の生活用具	53. 4～	国指定重要文化財「小河内の山村生活用具」を中心に山村の生活の様子を道具によって展示。
	奥多摩の蝶	56. 4～	奥多摩の蝶を標本によって展示。
調布市郷土博物館	「おじいちゃんの時代展」	57. 2.23～4.30	小中学生の郷土学習の参考のための展示で、今回は衣食住について明治～昭和初期と現在とを比較す。
	テーマ展「わらと暮らし」	57. 5.13～7.11	藁製品の文化的意義を考える。
	夏季特別展「多摩の自然とくらし」	57. 7.21～9. 30	失なわれつつある自然と生活道具を紹介し、私たちのくらしと自然のかかわり合いについて考えてみる。
	テーマ展「家」	57.10.12～12.19	さまざまな観点から「家」をとりあげ、人々が生活の中でそれらにどのように対応していったかを考える。
	郷土学習展「地図にみる調布の移りかわり」	58. 1. 5～4.10	江戸時代から調布市制施行後の町の発展までを、絵図、地図、模型などの資料をとおして考える機会とする。
町立五日市町郷土館	新旧街並写真展	57.10.24～58.1.23	五日市町の都道拡幅にともなう変貌を新旧写真の対比で展示。
東京都高尾自然科学博物館	季節展「多摩の自然」	57. 4. 4～5.30	多摩の自然（動・植物）の写真約40点を展示、解説
	〃「人里の植物」	57.10.17～11.30	身近な所に生えている植物、いわゆる雑草の標本と写真を展示。
八王子市郷土資料館	井上コレクション古瓦展	57. 6. 1～7.11	日本の古瓦（鎧瓦、宇瓦、鬼瓦、鴟尾、棰先瓦、文字瓦など） 369点、瓦経、瓦塔、塼仏、泥塔など18点、中国瓦塼など53点、朝鮮瓦塼など32点、その他５点を展示。
	旅だちの民俗	57.10.12～11. 21	ふる里から旅だつ、村をおとずれる旅人たち、旅のみち、旅としての人生の四項目に分け、多摩地域に残る旅に関する資料 172点を展示。
	人物コーナー「鈴木正三」	58. 2.13～3.27	八王子市内に建立した堅叔庵に一時止宿した江戸初期の禅僧鈴木正三（1579～1655）に関する八王子周辺に残る資料を展示し、その人物について紹介する。
東村山市立郷土館	農業のくらし展	55. 6～	滔々として生産、生業にあって土と汗ににじんだ農具、民具、庶民儀礼の用具など展観し、往時を偲び現在の変貌と豊かさを比較する“農業のくらし展”既に２年にわたるが時折、展示替もおこなう中にあって好評を博す。館そのものが狭溢なので展示に工夫しつつ、今日も続けている。

府中市立郷土館	第12回むさし府中の自然展「武蔵野台地の生いたちと府中」	57. 7.21～9. 6	自然調査の研究成果にもとづく定期特別展。府中市の生活基盤となっている武蔵野段丘のしくみと生いたちを見つめ直し、あわせて人間の生活との関連を理解する。地質露頭標本、貝化石、植物化石等を展示。
	市民芸術文化祭参加		
	「刀剣展」	57.11. 5～11. 7	市民が所蔵及び制作した芸術文化資料を展覧する。
	「和凧展」	57.11.11～11. 15	
	春季特別展「銘のある民具展」	58. 3. 6～5. 2	当館所蔵の民具資料のうち、農具、養蚕具、生活用具、消防用具等を中心に、銘のあるもの（墨書、焼印、刻印その他）を取りあげて展示する。
福生市郷土資料館	（常設展）	57. 4～7	
	歴史コーナー		
	「江戸時代の民間信仰展」	58. 8～12	念仏講、地蔵講にかかわる江戸時代の資料を展示。
	「千社札と絵馬展」	57. 4～9	庶民の信仰を考える資料として、千社札と絵馬 100点ほどを展示。
	民俗コーナー	57. 10～12	
	「竹の民具」		竹を材料として作られた様々な民具を展示。
	「多摩川の漁法と道具展」	57. 4～58. 2	多摩川でかって行われていた漁法と使用した道具を展示。
	スライドボックス	57. 7.29～8.30	「福生市の文化財」「福生の今とむかし」「福生市の石仏」「福生市の自然」を上映。
	（特別展）		
	「福生市の植物―野草」	57. 10.1～10. 30	資料室所蔵の植物標本資料から地域の特色をもったもの50点を展示。
	「第２回石の文化財写真展」	58. 1.19～3.14	市民の協力と参加を得て実施してきた市内石造遺物調査の写真資料の中から、地蔵と庚申塔を中心に50点ほどの写真を展示。
	企画展「庶民の文芸俳諧―芭蕉から友昇へ」		近世末期～明治初期にかけて地域で活躍した俳人の松原庵友昇にスポットをあて、庶民と文芸について展示する。芭蕉の怒推宛書簡、渡辺華山筆〝蕉門十哲図〟〝俳書〟など 130点を２期（１月19～２月13日 ２月16～３月14日）に分けて展示する。
町田市立博物館	色絵そばちょこ展	57. 4.20～5. 23	長宗希佳氏（田中千代学園短期大学教授）所蔵の絵がわり 200余種の色絵そばちょこを展示。
	江戸の矢立展	57. 6. 1～7. 11	町田市在住の矢立コレクター友野尊司氏の資料を中心に国立の各機関より借用し展示した。
	町田の自然展、暮らしの民具展	57. 7.20～8. 29	町田市域の昆虫、植物などについて昆虫標本、写真パネルなどによって展示。合わせて衣、食、住関係の民俗資料の展示も行った。
	チェコスロバキアのガラス展	57. 9. 7～10. 10	水指、花器、くだもの皿、果汁入れ鉢、タンブラー、ワイングラスなど18世紀～現代までのボヘミアングラスを展示。
	武相の絵馬展	57.10.19～11. 28	町田市域と周辺（東京、神奈川、埼玉）に見られる絵馬を展示。
	武蔵岡遺跡展	57.12.7～58.1. 30	町田市相原町にある遺跡で、縄文時代中期、古墳時代～平安時代までの出土品を展示。
	火の昔展―燈火具の変遷―	58. 2. 8～4. 10	ろうそくなどの灯火具、火切りなどの発火具、火鉢などの暖房具、囲炉裏に使う自在鍵などを展示。合わせて新収蔵品（民俗）も展示。

瑞穂町郷土資料館	吉川緑峰展	57.10.31～11. 7	緑峰は文化５年９月２日、埼玉県入間市宮寺に生まれ、20才の時江戸へ出て大岡雲峰の弟子となる。瑞穂町福正寺の観音堂の天井へ、花鳥竜などの絵を画き、地蔵堂へ竜を画き、町の文化財に関係深い人。今回緑峰の描いたさまざまな絵、使用した道具などを陳列した。
	〝着〟展	57.12. 1～12. 30	収集した衣に関係のある物を展示。鎖帷子、裃、直衣、軍隊用各種外套、火事装束、箱根縞の着物などを展示。
武蔵村山市歴史民俗資料館	常設展示　武蔵村山その自然、歴史、民俗	57.4.1～58.3. 31	考古資料、板碑、古文書、民俗資料等約 300点の実物資料を中心に、狭山丘陵の鳥や草花、原始・古代代から近代にいたる歴史、村山織物の変遷、養蚕、年中行事等に関する展示。
東京農工大学工学部附属繊維博物館	特別展「切手による繊維文化史」	57. 5.15～5.23	切手そのものは 150年足らずの歴史だが切手図案に繊維を扱ったものは多い。原料の綿、麻、絹、羊毛製品としては染織品、ニットレース、刺しゅうなど又、技術史の紡機、織機などやファッション、衣裳を含めると極めて多い。今回は繊維文化を中心とした切手約 5.000点を展示した。
	特別展「西関東の織物」	57.11. 6～11. 14	東京西部（八王子、青梅、村山）と埼玉県南西部(秩父、飯能、所沢）の６地区に焦点を合わせ、６機業地の歴史と現状を世に紹介した。いずれも独自の織物文化をもち現在に至っている。
	「高校生の染織展」	57. 3.15～4. 15	玉川学園高等部学生の作品、タペストリー他
	「手すき和紙の花展」	57. 4.20～5. 31	海部桃代氏作品、季節の花を和紙で表現したもの
	「趣味の切手展」	57. 6. 1～6. 30	本学教職員のコレクション、明治４年の切手から、夏目漱石のエンタイヤーなど
	「わらべはり絵展」	57. 7. 1～8. 31	小路和氏の作品、子供（わらべ）の世界を和紙はり絵で描いたもの。
	「組ひも展」	57. 9. 1～11. 30	土山コレクション（当館蔵）明治初期から現代の組ひも
	「地熱染の世界」	57.10.15～11. 30	木村幸江氏の作品、地熱ガスを利用した珍らしい染法のもの
	「紙による工芸展」	57.12.1～58.2.15	紙衣、紙布など12種の紙工芸作品展
	「昭和初期の木版画展」	58. 2.16～3. 31	中村コレクション（当館蔵）木版画家亀山氏の作品と当時代の木版画
	展示会「第２回サークル作品展」	58. 2. 9～2. 26	57年度友の会の７サークルの作品発表会

編　集　後　記

本年度、町立五日市郷土館が新しい仲間となりました。同館の発展を心からお祈り申し上げます。

各館から多くの原稿がよせられ、〔博物館活動のお知らせ〕は展示活動のみといたしました。　（Sa）

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
〒192 八王子市上野町70
八王子市郷土資料館内
☎ (0426) 22－8939
編集委員：川松康人　近藤晏仲
佐藤　広　横尾友一
印刷：ヒラツカ印刷社　八王子市八日町４－１